

日はまた沈む

ジャパン・パワーの限界

ビル・エモット 鈴木主税訳

草思社

日はまた沈む

ジャパン・パワーの限界

ビル・エモット 鈴木主税訳

日はまた沈む

1990 ©Soshisha



訳者との申し合わせにより検印廃止

1990年3月5日 第1刷発行

1990年5月21日 第25刷発行

著 者 ビル・エモット

訳 者 鈴木主税

装幀者 平野甲賀

発行者 加瀬昌男

印刷者 山田 博

発行所 株式会社 草 思 社

〒150 東京都渋谷区神宮前4-26-26

電 話 東京03(470)6565 振替 東京 7-23552

印 刷 三陽社／製 本 大口製本

ISBN 4-7942-0372-1

Printed in Japan

日本語版への序文

日本にはいつも世界中が驚かされている。地球の片隅に位置するこのおおいなる島国は、過去数十年のあいだ、再三にわたって世界の人びとを瞠目させてきたのだ。日本の社会と経済は、ひたすらある方向をめざして突っ走り、避けがたい危機に直面するかと思われたこともあったし、重要な局面で変化を受けつけないかに見えたこともあった。ところが、日本はそのつど驚くべき飛躍をとげ、急激に方向を転じて危機を回避するとともに、根本から変身できるという希有な能力を発揮し、当の日本人を含めて、その動向に注目していた人びとの目を見張らせたのである。

一九八七年に、本書の執筆をじつくりと考えたとき、私の心を占めていた思いは、日本の運命にたいするおおかたの見解は間違っているということだった。日本の内外のほとんどすべての解説者は、日米関係および日欧関係がかつてないほど激しく対立する方向へ否応なく進んでいると信じていた。

何といっても日本の貿易黒字は大きくなるいつばうで、資本輸出もますます拡大しそうだったし、日本の企業や金融機関は全世界を買収してしまいそうな勢いだったのである。日本の経済力が、やがては政治力、さらには軍事力にまで発展するのは確実だと思われたし、訓練がゆきとどいていて貯蓄率が高く、消

費が少なくて所得の分配が平等である日本の社会は、そうやすやすと変わりそうになかった。とりわけ日本の政治支配力は、一九五〇年代初頭から日本を動かしてきた与党の自由民主党にしっかりと握られてゆるぎないかに見えた。

本書は最初から、旧来のそうした見方は間違っているという立場に立っている。私の見方は次のような一般原則にもとづいている。すなわち、将来について全員の意見が一致しているときにこそ、その逆を考えたほうがいいということである。

理由は簡単だ。そうした全員一致の見解は、たいていの場合、荒っぽい推測、つまり最近の傾向を単純に延長して考えた結果にすぎないからである。たんにいまの趨勢から推測するというのは、先を見通すためには好ましくない方法だ。大きな傾向や動きというものは、かならずといっていいほど、それ自身をうちこわす種子をはらんでいる。したがって、ある傾向が最高潮に達するころには、それをうちこわす種子もしっかりと根づいているはずなのである。

本書の主眼はそこにある。一九八七年から八八年ごろまでの常識的な対日観は、日本という太陽はどこまでも昇りつづけるだろうというものだった。だが、私はこれにはまったく反対である。アメリカの作家アーネスト・ヘミングウェイの有名な作品の題を少々もじつていえば、「日本という日もまた沈む」と考えているわけだ。なぜなら、貿易黒字、資本輸出、そして円そのものによってもたらされた日本の経済力自体が、日本を根底から変化させ、新しい方向へ進ませることになるからである。

調査を終えて本書を執筆しはじめた一九八八年の夏、日本では私のそうした考えを裏づけるような出来事が起こりかけていたが、旧来の見方はまだ変わりそうになかった。たとえば、日本は外国製品の輸入を拒否すると考えられていた。外国人にいわせれば、日本は保護主義だということであり、日本人にいわせ

れば、外国製品は品質があまり良くないということだった。ところが、一九八八年までに、日本の製品輸入は年率五〇パーセントないしそれ以上の割合で増えていたのである。

一九八五年初頭から円の為替相場はほぼ二倍になり、外国旅行をする日本人は新たな金持気分を味わうようになった。とくに高い貯蓄率と貿易黒字によって日本国内で金がだぶついたために、地価や株価が急上昇して一部の日本人は非常に裕福になり、基本的な社会通念や伝統がくつがえされるようになった。

これらは従来の傾向をうちこわす種子であり、本書の各章を書きすすめながら、私はますます自信を強めた。日本は見る間に生産者の国から消費者の国へ、いつに変わらぬワーカホリックで貯蓄好きの国から快樂追求者の国へ、金銭的に慎重で自制心の強い国から投資家の国へと様変わりしていったのである。そして、長い目で見れば、日本は若者の国から白髪まじりの年金生活者の国に変わろうとしている。

しかし日本は、劇的かつ急激な変化を予想している私のような者をすらも、さらに驚かせてくれた。思いもよらなかったことだが、本書を執筆しているあいだに、日本の政治に関する旧来の思いこみがすべて砕け散ろうとしていたのである。自民党が三パーセントの消費税導入を初めて主張した。リクルート事件が初めて明るみに出た。当時のおおかたの見方としては、消費税にしろリクルート事件にしろ、政治の現状をくつがえすまでにはいたらないと思われていた。一九七四年の田中角栄首相の退陣から七六年のロッキード事件のときにもそうだった。自民党は産業界や官僚の応援を得て嵐を乗りきり、権力をがっちりと握りつづけるに決まっているではないか。

毎月のように新しい事実があばかれてショックを受けても、その見方がゆらぐことにはならないようだった。しかし、これまでのところでは、その見方は間違っている。私が日本を再訪した一九八八年六月当

時、社会党が選挙に勝つ公算が少しでもあると誰が予想しただろうか？ 土井たか子委員長でさえ勝てるとは思っていなかっただろう。しかし、それからちょうど一年後の一九八九年七月に行われた参議院議員選挙で、それが現実となった。社会党はまだ政権をとることはできないかもしれない。だが、その可能性がしかるべき人びとによって真剣に論議されること自体、驚き以外の何ものでもないのである。

あとから考えれば、これも驚くほどのことではなかった。日本の経済的興隆がそれに逆行する種子を、あるいは少なくとも急激な変化を引き起こす要素を内包しているという私の見方からすれば、予想どおりとさえいえる。一九八八年から八九年にかけての日本の政治の混乱は、直接的には金銭スキャンダルやリクルート社という一企業の行動とはほとんど関係がない。それは経済力によって引き起こされたのである。一九八五年以後の日本に生まれた巨額の富と自由な資本の流れは、日本人の行動や姿勢、関係のあり方を変化させ、遠い昔に確立された伝統的な行き方と衝突を起こした。最も重要なのは、あふれる富が日本のあらゆるところでインサイダーとアウトサイダーとのあいだに摩擦を生じさせたことである。

このために、政治機構の外にいる者は、そのなかにいる者が時代に対応しきれないことに怒りと欲求不満を感じるようになった。個人であれ企業であれ、地価や株価の上昇によって法外な富を手にしたニュー・リッチと、その恩恵にあずかれないどころか、かえって苦しめられている人びととのあいだに新しい分裂が起こった。これが、かつては安定していた一部の受益者グループ、とりわけ農民や中小売業者の存立をおびやかしている。

こうした経済的な変化をもたらすから、結局は政治に影響をおよぼさずにはいない。現在、自民党をはじめとする日本の政党が直面している課題は、このような変化にいかに対応するかということである。社会党は、世界における日本の新しい位置と日米関係に対応しなければならない。自民党は、個

人あるいはグループとしてどう行動しようと政權の座がゆるがなかった時代がもう終わったという事実に対応しなければならぬ。

一九九〇年には衆議院議員選挙が控えていることから見て、こうした対応は早急になされなければならないだろう。同時に、日本の経済もまた驚くほど急速に順応しつつある。アメリカの議員は認めないだろうが、日本の輸入が伸びて輸出が停滞し、海外旅行者が増加して円を使いまくっている現在、日本の貿易黒字と経常収支の黒字は急減している。国内経済はいまも、そして将来もきわめて好調で、国民総生産は四ないし五パーセントの成長をつづけるだろう。だが、その成長はすべて国内需要によってもたらされるもので、輸出によるものではないのである。

日本の経済的な海外進出は、際限なくつづくものではない。日はまた沈むのだ。だが、悲しいことに、私の言葉を信じるアメリカ人もヨーロッパ人もまだ非常に少ない。ジャパン・バッシングはいまもワシントンで最も人気のあるスポーツであり、アメリカの経済的、政治的な誤りを日本のせいにしたがる傾向は相変わらず強い。同じく日本人も、直面する課題や難題をアメリカ人のせいにしたがる傾向がある。

だが、どちらも間違っている。この二国が現在かかえている問題は共通の原因を持ち、両者に共通の治療がどこされなければならないのだ。対立よりも相互理解と協調のほうが成果はずっと大きい。日本の進む方向を明らかにしようとする本書が、アメリカとヨーロッパと日本の協力関係の強化に少しでも役立てば幸いである。

一九八九年九月

ロンドンにて

ビル・エモット

はじめに

「金で友情が買えるわけではなく、かえって激しい敵意を招くのがおちだ」と、イギリスのコメディアン、スパイク・ミリガンは書いている。だが、金は力をもたらず。だからこそ、日本が金持になるにつれ、世界情勢におよぼされる日本の影響力も大きくなったのだ。日本の富が増大するとともに、日本がいつ、どのようにして手をゆるめるようになるのかと、今の日本人が思いはじめるのは理の当然として、ジャパン・ウォッチャーたちも揣摩憶測しはじめている。日本は世界を買い占めてしまい、金融市場を支配するようになるのだろうか？ もっと国際的な責任をになって、超大国になるのだろうか？ 日本の力はいつまでつづくのだろうか？ 富によって日本は変わるのだろうか？ 衰退しつつあるアメリカのリーダーシップを肩代わりするのだろうか？ そして何よりも、日本はまたしても軍事大国になるのだろうか？

本書の意図は、なろうことなら、そうした疑問に答えることである。すなわち、日本の進む方向と、日本が経済、金融、社会、政治の面で、どのように変わっていくのかを明らかにしたいのである。したがって本書は、日本という国の寸描でもなければ、日本の動向をステイックに記述しようとするものでもない。すでにおびただしい本があり、本書の著者のおよびもつかぬ専門的知識をもって、手ぎわよくそれを

やつてのけている。そのようなわけで、『日はまた沈む』が明らかにしようとしているのは、不斷に変わりつつある一つの主題を分析すること、つまり日本の進路を示すとともに、その動きの速度を計ることなのである。

そのような試みにはつねに危険がともなう。どうしても予言することを避けるわけにはいかないからだ。サミュエル・ゴールドウインはこう戒めている。「将来のことなど予言してはいけない」と。しかしながら、著者の願ひは、本書によつて日本の力をどう考えたらよいかを示したい、ということでもある。そのために、日本をめぐるいくつかの問題——日本はそれほど強力になるのか、その力がいつまで保持されるのか、日本の潜在的な力がどのような状況で軍事および政治の面で顕在化するのか——を左右する諸要因を見きわめたいと考えている。そうすれば、シドニー・ウェッブのあの言葉——「経済学者は概して的を射た予測をするが、その日付については概して大きく誤るものだ」——に共感する者は、日本に関して自分なりにタイムテーブルを設定できるわけである。

そうした本書の意図を実現するには、富を謳歌する日本一国だけを考察するわけにはいかない。国力とその影響力は、政治においても経済においても、絶対的なものではなく、つねに他の国々と相關しているからだ。ひらたくいえば、本書の問題は日本だけにかぎられるのではなく、当然アメリカにもかかわりがあるし、それほど深くはないにせよ、ヨーロッパも関与してこざるをえないのである。とくに重要なこととして、本書では次のような問題を取り上げなければならぬ。アメリカはすでに峠を越した国なのかどうか、その国力と影響力を日本のそれと比較した場合にどうなのか、といったことである。その問題については、主として日本を扱った諸章でも随時考察を加えているが、とくに第三部をそれにあてている。また、最終章はほぼ全面的にアメリカ合衆国のために費やしている。

とはいえ、それはアメリカの過去と未来を厳密かつ徹底的に検討したものではない。そのためには、もっぱらそのテーマで一冊の本を書く必要があるばかりでなく、本書の著者よりもずっとアメリカの諸問題に精通している練達の執筆者が求められるからである。ともあれ最終章は、一九八〇年代末のアメリカの状況をめぐるエッセイとして読んでいただければよく、それはロンドンにいて金融およびビジネスについて考えたり書いたりすることを仕事とし、それ以前の数年間はもっぱら日本の諸問題を追いかけてきた一人の局外者の目に映ったものである。そこでのねらいは、アメリカを日本の力というコンテキストのなかに置くと同時に、日本をアメリカの力というコンテキストのなかに置いて見ることなのである。

アメリカと同じく、本書の著者もいまや純債務者となつてしまった。もつとも、幸運なことに、その債務の内容は何兆という巨額のドルではなく、与えられた援助や助言への感謝という気持のうえでの負債である。私の債権者のリストの最上位にあるのは、英「エコノミスト」誌と、とりわけ一九八六年から同誌の編集長をつとめたアンドルー・ナイトである。私を同誌の東京支局長として派遣し、日本について知る機会を与えてくれたことに感謝したい。アンドルーの後任でかつての私の共著者であるルパート・ペナン・ト・リーは、寛大にもその後一九八八年に休暇を与えてくれたが、それがなければ本書は世にあらわれなかったことだろう。またヴィンス・マカラックは、金融問題担当の編集者として私の代役をつとめてくれ（さらに私の仕事を引き継いでくれ）、私が実際にその休暇の申し出を受けられるようにしてくれた。

本書の計画を知って、またそれとはかわりなく東京支局長としての私に協力してくれ、インタビュなどの便宜をはかってくれた人びとはあまりにも多く、ここにはとても書ききれない。それらの人びとすべてに感謝する。なかでも一九八八年の半ばに東京を再訪して長く滞在したおり、インタビュの手配を

してくれたフォーリン・プレス・センターの河村欣二、長塚徹、矢野純一の諸氏には、とくに名を記して感謝したい。東京再訪については日本航空のジェフリー・テューダーおよびマーティン・シルウッドの配慮をいただいたが、そのことにたいして深くお礼申し上げる。そのときの滞在中に助言をしてくれ、便宜をはかるなど何くれとなく世話をして下さったのは、ポール・メイドメント、リサ・マーティノー、河村多恵子、三國陽夫の諸氏である。

本書にはまだ欠陥があるだろうが、つねに思慮をもって辛抱づよく支えてくれたゴードン・リーがいなかったら、この本がもっとひどいものになったことは疑いない。彼は本書の全部を草稿の段階で何度も読んでくれ、このうえない熱意をもってじつに多くの提案や批判を寄せてくれたのである。クライヴ・クルックとステイヴ・ライリーにもやはり何章か読んでもらったが、二人とも多くの誤りを指摘してくれ、本書を改良するうえで力になってくれた。英「エコノミスト」誌の東京支社の私のもとアシスタント、浅見広子はさまざまな調査を手伝ってくれ、そこに含まれている多くの意見や事実をチェックしてくれた。また鈴木律は、解釈するうえでの厄介な事柄について力になってくれた。本書のアイデアの一部は「日本の力の限界」と題したエッセイにもりこまれたものだが、このエッセイは一九八八年に「アメリカン・エクスプレス・バンク・レビュー」誌がロバート・マージョリンを記念して行ったコンテストに応募したものである。したがって、私にそのコンテストの一等賞を与えてくれたばかりか、そのエッセイを本書の11章の最初の草稿とすることを容認してくれたことについて、アメックスに感謝するものである。

私の担当編集者たち、すなわちニューヨークのジョナサン・シーガルとルース・フェシックおよびロンドンのニコラス・ブリアリーには、その熱意と配慮のみならず、本書の構成と内容を決定するうえで意見を述べてくれたことについて感謝したい。私のエージェントのダシャ・シエンクマンは、この本の発端と

なった抽象的で漠然とした思いつきを具体的な出版計画に育てあげるとともに、実現に向けて絶えずはげましてくれた。執筆のために人里離れた快適なコテージを提供してくれたのは、チャールズ・ウエアとヘレナ・ハーディング、それにジョンおよびヒラリー・アンドルーズである。ここに名前をあげた人びとを含めて多くの人びとに称賛の念をこめて感謝するものではあるが、それでもなお本書に残る誤りや遺漏、拙劣な表現などについての非は、もちろん、全面的に私が負うべきものである。

日はまた沈む——目次

日本語版への序文

はじめに

第一部 力と妄想

1章 日本の挑戦

懐疑から恐怖へ 24

日本はかぎりなく発展し、アメリカは衰退するのか？ 28

日本が大国だって？ 33

核兵器の影響 36

パワー・ゲーム 39

金が日本を動かしている 41

日本の金となる木 46

第二部 変化と驚異

2章 消費者の国

変化の伝統 54

不測の事態を予測せよ 60

にわかに起こった消費ブーム 61